

4718

瘦々亭
骨皮道人著

樂
—
々
草
誌
全



091788-000-7

特11-489

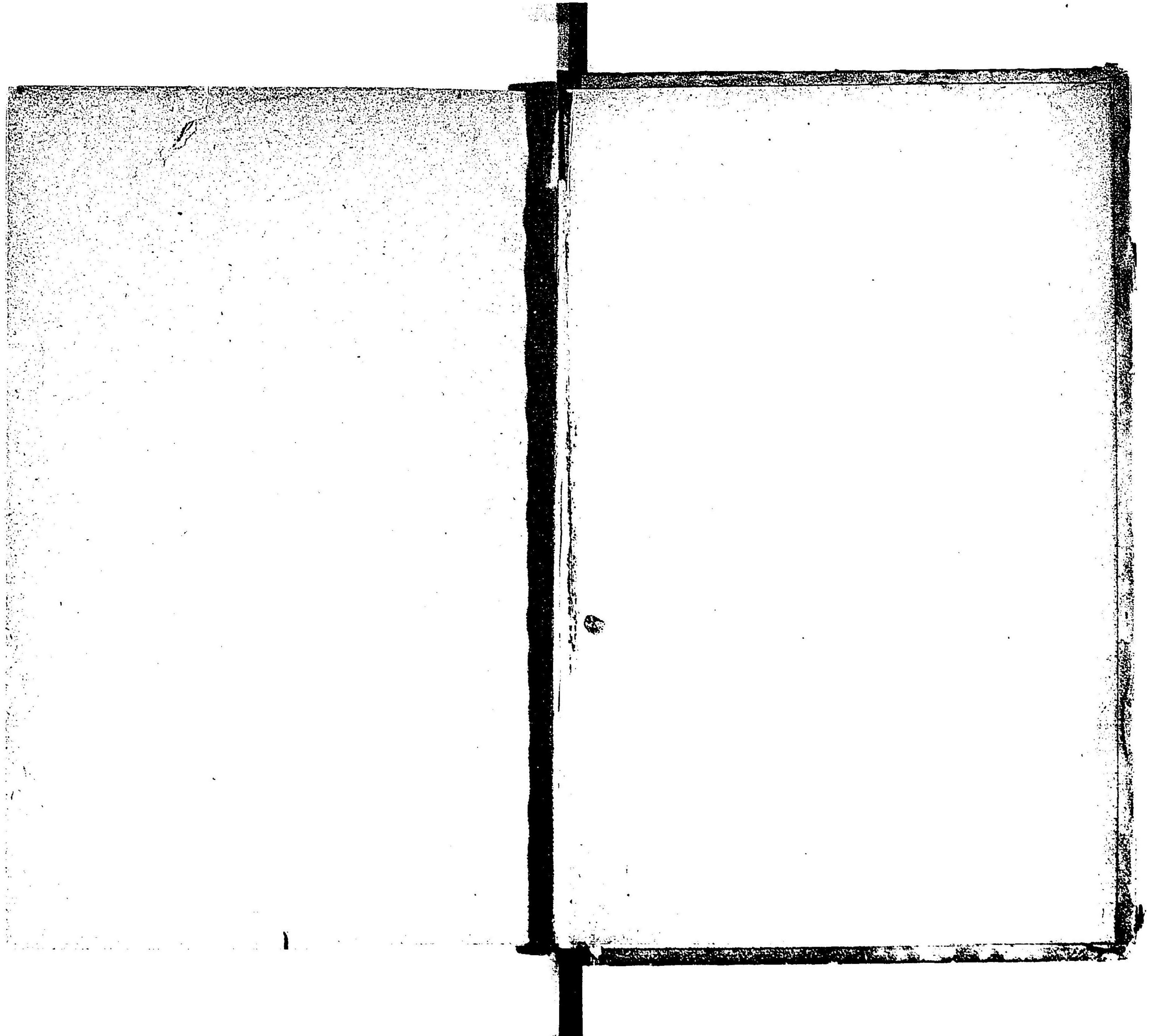
樂々草誌

瘦々亭 骨皮道人／編

M22

DBO-0303





あり其生離き種を蒔て樂まじめんと欲するが即ち此書の大眼目にして十人の十色の杓子定木に因り種々様々の樂み種を擔ぎ出たるの即ち編者の手柄あり故に都々一を好む人の都々一を講ふて樂むべく樂唄を好む人の樂唄を迂鳴て樂むべく狂歌を好む人の狂歌を樂むべくトツケリトンを好む人のトツケリトンを樂むべく其他狂文あり狂句あり今様あり俳優あり何あり斯あり凡そ樂みの種とあるべき者のお好み次第あれば諸君宜しく此一冊を座右に備へて翠玉の轍を伸し給へと云ふ者の豫てお馴染の瘦々亭骨皮道人あり

樂み草誌の序 終



樂
前
女
懐
不
金

梅

樂たのしみ草誌ざうし目錄もくろく

- 大晦日おほみそひ貧福合ひんふくあひ戦記せんき
- 頓智とんちを以てもつて難なんをを迎むかへるゝ話はなし
- 晝寐ひるねの寐言ねごころ
- のゝ字じ十一字じゅういちじを合あはせせるゝ歌うた
- 五色いそを詠よむゝ俳借はいか歌うた
- 廻文くわいぶん和歌わが
- 戀こひに寄よりてゝ十二支じふにし並ならびにゝ五行ごかうをよめるゝ狂歌きやうか
- 東海道とうかいだうの宿名詠しゆくめいよ込こみ狂歌きやうか
- 樂は唄うたの變調へんてう
- 猫ねこぢやゝの變調へんてう

- おやまかキヤンリンの變調
- たかの達摩の變調
- トツチリトン
- 大津繪ぶし變調
- 今様
- 一口ばなし
- 七曜文字詠込み發句
- 花づくし狂句
- フル盡し當世の姿見
- 世間不通新熟字
- 新撰軍歌の口真似
- 實誤教

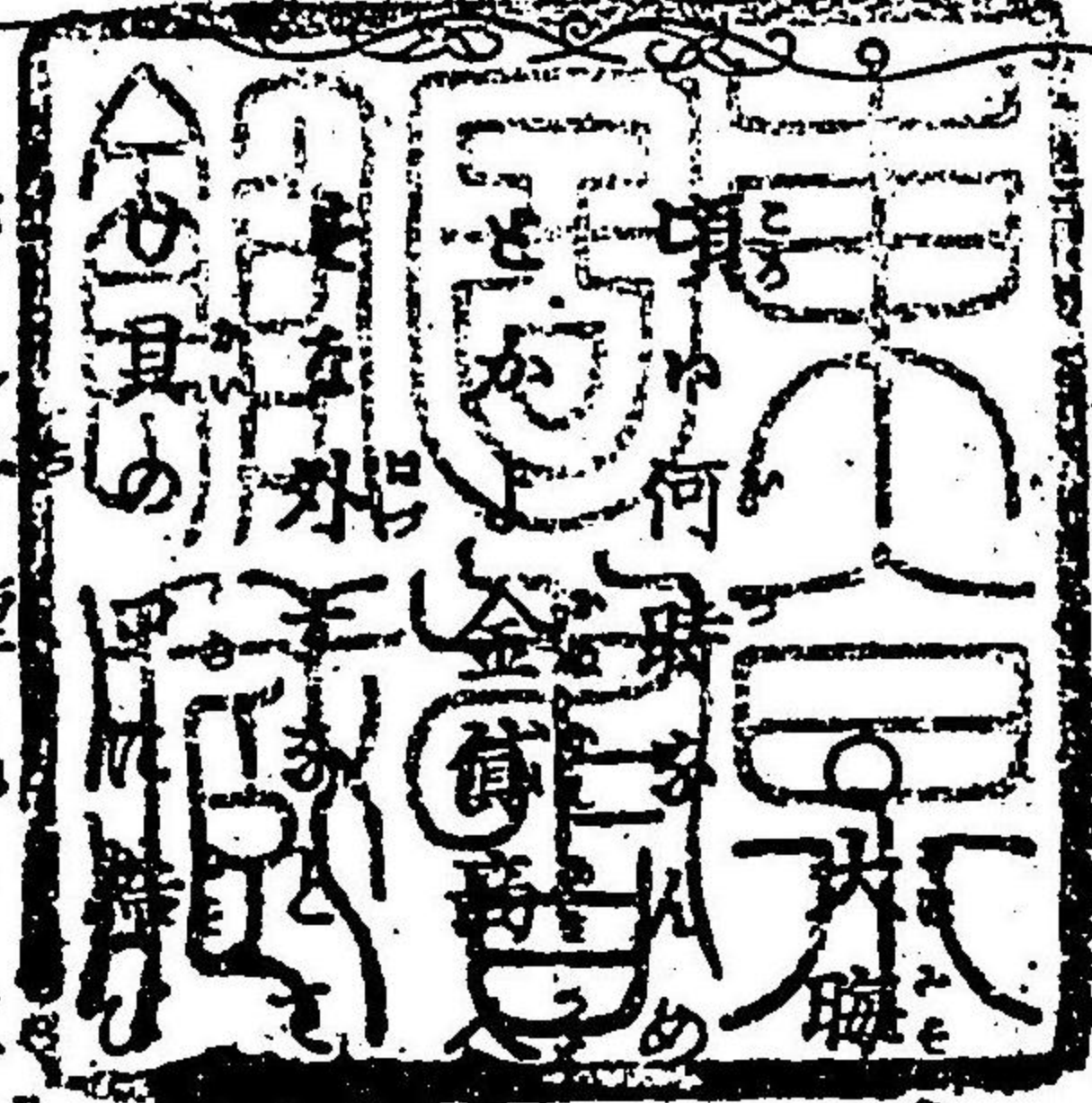
- 骸骨の三絃を彈むる圖に題する歌
- 戯れ文
- 某妓に代つて遊客の弊風を述ぶ
- 謎づくし
- 西洋と日本との比べ物
- 都と一ほんにれ前り盡し
- 同しばし留たき盡し
- 同つもりくて盡し
- 酒器よみ込み都と一
- 冠づけ狂句今あらは
- 狂句邪魔ふされ盡し
- 同すかぬはづ盡し

- 狂句下女おもひ盡し
- 廻文狂句
- ニツ三ツ四ツの狂歌
- 何を種として嘘やつくらんの上の句づけ
- プンと采香に寐て居られぬの上の句づけ
- 百人一首下の句づけ
- 同上の句づけ
- 地口
- 大學の口真似
- 某娘ふ代つて出雲神社に奉つる書
- ベラの勢力
- 野良倉生の破れ衣服を着て故郷に歸るを送る文

- 文句入り都より一
- 似屁物語

樂たのし
み 草誌ざうし
目録もくろく 終

(一) 樂 草 誌



樂 草 誌

日貧福合戰記
 走る月日に追駈
 られたる大晦日の事
 頭掛取の無て待得し時来れり此圖を抜
 唐の七時すぎの見世羽織を取て肩に投か
 小倉帯の右手の小脇へ鐵砲形の矢立
 筒深し穿た着馴し布子を裾短かき端
 折り紺地の前垂草摺長に下し皮財布を母衣の如く負ひ
 一吸の煙草の根烟をあげるを相圖に膝栗毛を兼出し

骨皮道人 笑関
 自笑居士 笑録

真先に書出しの大旗小旗を進めつ、得意を指て悠々と押出したる勢ひの若し敵城よて言譚の小楯の蔭ら素矢おど射まば電ふか々たる鍋釜をも引さらはんとぞ見へふ々る爰よ又た負債駿河の守青息の今日早朝より金貨商人の頭等が総攻めの無て期したる事あるゆゑ戸棚の中を空にしてスリと云はたて籠らんと避身に成て猶日指揮おし我が履物の疾く隠せ帽子をおいて見つかるお女房左衛門の耐の入口の大手を固め障子の狭間より速見して敵に城内を履ませるお平常の夜又心を現はす時の今日あるぞ方便の虚が妄語にあらぬやう螺吹き鳴し鉄砲を舌にまうせ打とてよ然れど寄手の大将を好色と見は如菩薩の外面を以て立向へ弱よく剛を制するの理の娼妓が壮士の勇と恐

れを以て海鼠の如くグニヤ／＼とさせると知るべしソレ搦め手の水口近く物音せり敵よせたりと覺ゆるお油断するなと聲を竊め眼を配りてキヨロつけり然るほど商人の頭掛取の揉揉で押し来り駿河の守が大手先木戸口までぞ攻め寄せけるトまで違て見たが扱てこの合戦に懸取が負きは縁起が悪いと云ふだらうし又た懸取が身代限りとても成たら不愉快に思ふだらう其處で是れは先づ中止として

懸取ぬ人お音でも聞せんと

除夜打はらふ百八の鐘

○頓智を以て難を避る、話し

茲に富る紳縉家あり常に将を好み暗て風あき日の

程遠からぬ野山へ出て心を慰めけるが時しも彌生中ば
の長閑あるに乗じて例の如く狩り遊び打よく一羽の鶴を
獲て一方ならぬ悦びふ此日早く家へ歸り料理人なる幸
吉に獲物の鶴を渡し友人を招き集めて愉快ある春の酒宴
を催ふすべければ今より之を調理して全身の儘に炙り西
洋料理に仕立てよと命令せし主人の居間へ戻り猶も用
意を命じつ、客や遅しと待居たり厨の幸吉が頼り料理
を引受今宵こそ晴の饗應あれば我が腕前を願はさんと心
を配り鶴の毛羽を抜き終り脚を束ね串を指して速火に炙り
さも甘さうに匂はせたり折しも窓に呼者あり幸吉小唄に
答へつ、呼入れたるの無て名馴の女にて顔の十人並おれ
ど心の世よ云ふ天保録少し足おひ性質あるれ梅と云へる

者よて暫しの中に話しも濟みお梅の残り惜氣よ才み居た
りしが鶴の程よく焼たるを見て咽をあらし炙りし鳥の一
股を要し恵み賜へとの無心を請々幸吉心よ思ふやう此鶴
の全身揃へて料理せよと懇ろなる命令ゆゑ片股だにも切
り得らまねば程よく云て断りたまどもれ梅の閑入きを扱
も情を白鷺やあんに足ぬ鷺ちやとてよい信天翁ふ鷺鷥
おお前よ初めて鵬のその雲雀から今日までも仇し心の水
鳥の巖も通を通じ鴨口の鏡鷺云はるいで誠の心明がらま
カワイヤ、アと想ふなろ水鶏と云ふて下さんせと永き恨
みの數に幸吉の持餘し天窓をかい居たりしが好と云
ひつ、小刀を手よ把り片股切てど渡したり折しも響く車
の音續いて入り来る客の人よ夫度好と幸吉の順序を立

て夫々に馳走の品を繰出も主人の無て待受たる鶴や遅し
 と目配しませれば酒筵央ば一持出す一皿これ今日之眼
 目なれ諸君數杯を過し給へと眼先へ進める大皿ふ洋燈の
 光の煌々たりこの主人の鶴を熟視全体揃ひし物が一本の
 足ふ成りしに訝らし片股の何處もあるぞ疾く持来れと呼
 立ちられ幸吉の周章て答へ一諾り鶴の旦那も見賜ふ通り皆
 お一本の脚ありと答へも終らざるに主人の勃然怒りおの
 白痴引込み居れと大音揚て叱りても幸吉の猶や真面目顔
 さても旦那の氣短なる實一今云し通り鶴の脚に二本あ
 る者絶て無し鶴の幾羽も居るおれは慥お證據を願はして
 其れ疑ひを晴すべしとの答へお主人の愈く呆れたれど
 客の手前を無その場の濟せ次の朝主人の一本脚の鶴ある

か案内させて困らせ兵人と未明に起き出て車を命じ幸吉
 諸共乗り組ど和らぎ無し心と心角ぐむ芦の川縁を所定め
 めを廻りて群居る鶴を尋ねたり幸吉の主人の怒りを吸み
 取り如何せばやと打案じ頓て一つの遁辭を考へ心密かに
 悦ぶ折るら芦の内三羽の鶴がのみ居るを見かけ是ぞ証
 據と飛立つ嬉しき車を止め眼を据て視詰れば鶴の何れも
 眠り一つの脚にて立たる故お仕濟しと喜び旦那校處
 にお證據があるとおかし顔して述べたるに主人も鶴を見て成
 程さお片脚なれども今一本を汝に見せんと両手を高く振
 揚て追ひかくる様をおしければ三羽の鶴の一足二足とソ
 ロ／＼歩みを移し又たおみて二本の脚を願はせば叔こそ
 二本を見留たり汝が何と答ふるぞと主人に強く詰付られ

彼の武骨ある莊周と云へる翁の婀娜ある花ふくる
 ひ戯むれしも夢一胡蝶とありたまはあり邯鄲の枕に榮枯
 盛衰の理を悟りつるも南柯の國に富貴を極めしも皆一時
 うたゝ寝の夢の賜のなりうし去れば晝眠をするを叱る
 中、に愚あり且つや人間の一生の夢の如しその夢の世に
 朝まだき一起き夜半に卧し西一走り東ふ馳せ目前の名利
 を求むるの尚ほ夢の中一夢みて夢を苦み病む一異あるこ
 とおし去れば夏の日の炎熱に惱める時おどら先づ晝寝を
 始めて此世の苦を免かれ尚更一幻しの中に玉もて鏤めた
 る高閣一思ふ別嬪を抱きて珍味佳肴一飽くべし若し我と
 共にこの世を愛しとも苦しとも嘆つ人のあらば早く晝寝
 を爲して三伏の苦しみを忘れ給ふべし去れど餘り長眠り

幸吉のぬらぬ顔一本脚の鶴ありしを旦那が手を揚げ
 をかけ無理に二本にさせたるあり昨夜の鶴も今する通り
 に爲し賜は、又た一本の脚を出たるあらんと返答に思
 りて手を拍ち今までの怒りも笑ひと成りたりとぞ
 ○晝寝の寐言
 晝寝を爲すの宜しき事と云ふべきか宰予の孔子に叱られ
 たり惡き事と爲さんか大石内藏之助の伊藤仁齋に譽られ
 たる例しあれは孰れが宜きか孰れが惡きかトンと辨別を
 爲し難し去れど夢みることに假眠の時ころよろしく又と
 假眠の晝寝を爲すころ心地よけれ扱て夢見る事が何程の
 功德ありやと云ふ孔子が思ひに思ひとかけ戀きに戀ま
 たる周公の贅しがほど語らひたるの夢の賜のあらすや又

暮て行く秋を水のきそひしか
 立田川さしの紅葉の散る日より
 何方も牛うる軒の看板の
 文字に心の見ゆる色か
 夜がらすの燈を立つれど白鷺の
 いろは見分ぬ雪の朝か
 夕立の雲のうつりて水の瀬も

死せるに均しけれは醒むべき時
 生覺よて寐惚たる所爲人の笑ひ
 草なれば覺たる上の
 活潑の事業をなして同時に天下
 の畫寐を覺まこそよけ
 ○の、字十一を含ませる狂歌
 ○野の宮の森の木の間のはのほのと
 花よ明ゆくしの、めの空
 ○五色と詠る俳偕歌
 万代をすぎにしことし生ひにけり
 色ことあらぬ代乃くれ竹
 淺澤のあし間をわたりて浮かもの
 みどり羽見れば霜かれもあし
 富士がねのみどりを空に残し置て

名にやあがる、墨田の川面

降りつもる雪のあしたの一時の

煙の目立つ遠のすみうま

○廻文和歌
しら波の又もや光るよき濱

さよるかひやも玉のみあらし

○戀に寄て十二支あらびに五行を

よめる狂歌

子 神かけて誓ふまゐるしか逢初し

丑 甲子待に得たる子だから

うしや君今宵の忍び来まふて

戀の重荷を扶々あひせむ

寅 逢ぬゆゑ千里の藪も近からず

卯 兔や斯と心の兔忍びあし

とらまへ處も無き返事する

辰 富士を越も力もあるよ龍田紙

一重障子もまゝ、あらぬ憂き

巳 身の離る歌字盡しも恨めしや

己れがしたに附ぬうき君

午 二世かけてかいら毛と思ふ誓文

互ひふりまき中子嬉しき

未 寶ふあらぬ妹が門田のひつじはえ

思ひのたけも伸ぬ苦しき

申 重ねての見まじ言まじ聞まじや

酉 きぬくの鶏の鳴とも離るまじ

戌 白あみと人や答むる夜毎来て

亥 今更に外へ荷向く事あらじ

木 幾年か年経る槻のつきぬ中

火 浅ましや燃る思ひの胸の火を

君あらで消まらんあらじや

土 捨られし身の塵土と何か成て

金 金の曼得てし心地も今に成て

水 明暮もふかき思ひの涙が

島田 〇東海道宿名よみ込み狂歌

男まさりの里の賤の女

金谷 世の塵を厭ふ心でまめるか

日坂 踊るかほ謡ふ聲さへ親に似つ

酒機 嶽よきまでも其ま、
掛川 渡し船まつてく と聲をかけ

見付 見つけたぞ花盗人よ百年目
河原はせ行く旅の人かあ

○我が物の變調
逃りや捕りぬ一念もあし

あがものと思へばおもさ借金の利息のおも荷肩にか
け縁ざにあれば夏冬のあつさ寒さに身をいたため持た
甲斐あきやせ世帯ほんに違る瀬があいあいあ

○香に迷ふの變調
江に通ふ舟が帆影に飛千鳥風に行術を曲浦のかけて
世話しき雄のあみ結ぶ糸にし定めあくまだ漕や

らぬ捨小舟にたのみて水莖の心も迷ふ戀の淵さそ
ふ流れのまことの君が言葉うれしき閨の裡

○かき送るの變調

散りのこる花もいつしか若葉して空にひと聲ほど、
ぎす雲にせかれて影さへも月が姿かまがたが月か更
て主まつ胸の中ほんに血を吐く思ひがまるぞエ、

○今朝の雨の變調

今朝のあつ雨にグツスリと又と寐つぐけの無性者破
れし儘の夜具の裏璞の生るし風いたかるモウシ隣家
の人へ今の時計の何時ぢやエアレ願ひます茶を一ツ
序に煙草の火がほしや

○あさくとももの變調

隅田川あがま燈籠をみやこ鳥涼みがてらの船の中
ツソリとした差向ひ是も保養ぢやあいかいあ

○同 下戸

おいしさも至極名高き阿部川のブんど鼻つく焼たて
をつまんで食た其時が賢に忘られあいわいあ

○同 上戸

多くとも飲む氣の止まぬグデン坊とうと杯あみがさ
に被ぶツて見たれよじくと是が愉快ぢやあいかい

○忍ぶ戀路の變調

主をまつ夜に扱て果敢あさよ門の戸た、く夜嵐や闇
に影さす鳥影も若やそれかと胸さもぎ

○同

地獄まる身いさてあぶあさよ一寸ねるのも命がけま
げく廻るれまわりの其目を偷む無理あこと

○夕暮の變調

夕ぐれに湯屋でみがいて澄し顔いやに身ありをまら
がへて間抜た風が消たぞへやレ金がほし芳原の夜梅
に用事があるまいあ

○同

きぬくに寐まきの儘のしどけあく送る廊下の短か
さもまとの逢瀬の辻占かアレ待ちあんし待あまし羽
織あをしてあげんせう

○同

夕暮に眺め見渡す八坂町婀娜姿の薄化粧い裳裾
が見ゆるぞへアレ笛が鳴る三絃の音の都おどりがあ
るまいあ

○一ト言の變調

一言を十言に罵詈訾す山の神口惜からうがモウ新様を
虚言よも野蠻に止にしてエ、呉んかへ

○月の重あるの變調

月の重ある利息の積る如何せうぞい十萬む如何せう
ぞい十身代限りをまるまいあオーサ捨とけ放とけ

○竹にありたやの變調

猫にありたや應采の娼妓めかしてそれ達ふ主を定め
ぞ待合の假寐も繋し床の内それく

○うば玉の變調

玉簾の内やゆかしき涼み舟意氣を音メの爪弾も人目
をかねし忍び駒樂しい中ぢや無いかいあ

○十日経子の變調

向ひの二階をチヨイと見ればお篝の側に猫が居る篝
を引のかぎやれるのか何ぢや枝ぢややら食て居る音
い物やら啼出した

○雪の巴の變調

顔をしきりと打あがめ身にしむ夜半の寒風にお風の
すあと聲ひそめ呼べど起せど答へあくアレたぬま察
入ぢやあいかいナ

○我戀の變調

我戀の糸張金の電信機渡すよや速し渡さねばれもふ
便りが聞へあい

○同

我が戀の神あし月の時雨ぞら照とれもへバ又た曇る
袖に涙おしめりがち

○宇治の茶處の變調

秋の風情もさまざまに月よ啼たつ機かり虫と人の氣
ふ合ふ耳ふつく草も露もつ寂々庭さびた景色のしほ
らしやコリヤく六三の園ぢやもの

○一聲の變調

誰が爲ふておれ初しぞ螢火の草すださてくよく
と泣ぬ泣に増し清水の露の情けや蓬生に影をつ

めどほんのりと穂にあらはれしかるかやの衰葉の影
にいとふ身をこがま

○猫ぢやくの替歌

鬣ぢやくと被仰ままが鬣が靴はいて馬車へ乗て洋
服の穿袖て来るものかオツチヨコチヨイノチヨイ

○おやまかチヤンリンの替歌

番頭も手代も北國まじり主ぢやお供てアベコベだん
べ、大方そのへん

旦那の形態を頭痛に病は奥深内証て焼餅だんべ、オ

ヤ馬鹿りんぎ、傍から浮氣

目元でからんで口舌でまるめ三絃を引よせお枕だん

べ、オヤ馬鹿旦那、傍から寐んね

權 妻 顔 して ツン / する 赤 張 り む かし の 應 米 だ ん

資 金 お し ん で 學 校 へ 出 さ せ 我 子 無 學 に 仕 込 む の だ ん
べ、 親 馬 鹿 ち や ん り ん

○ た ち の 達 磨 の 變 調
餘 り 時 雨 ふ か さ 小 庭 の 枝 折 戸 を 手 ヨ イ と 明 て 落 葉 掃
た り ま た 焚 せ て も 見 た り

○ ト ツ チ リ ト ン

西 京 婦 人 も 東 京 を が た 女 紅 學 校 は げ ま し て 堅 い 心 の
鉄 道 や 音 信 電 信 か け 渡 し 文 の 契 り の 郵 便 に 走 る 馬 車
か ら 乗 が き て 愛 に 引 か る、 人 力 車 浮 名 を た て る 新 聞
紙 煙 を お び か ま 紙 車

○ 煙 草 の 愚 痴

煙 草 同 士 の 云 ふ 事 き け ば 初 手 は と ら れ て 枯 ら さ れ て
切 り 刻 ま れ た 其 上 に 賣 ら れ て 買 ら れ て 捨 ら れ て 末 の 火
皿 の 攻 め 苦 さ へ 爰 が 我 慢 と し の べ ど も 輪 に お く 烟 と
立 消 て 阿 房 草 と の 曲 が あ い

○ 大 津 繪 ぶ し 變 調

春 雨 に シ ツ ボ リ と 抱 て 音 づ め の 合 の 手 に ぬ れ て 二 人
の さ し 向 ひ あ だ に 調 べ し 爪 弾 の 本 て う し の 扱 置 て 糸
し 皮 い の 二 上 り に 義 理 や 世 間 の 水 調 子 し た ん 棹 ち ら
く る ひ 出 し 一 夜 の 夢 の か り ん 堂 今 と な り て 三 下 り
人 目 世 間 を は ぶ り 忍 び 駒

○今様

アレ彼の通り蒸氣車がゆきつ戻りつ品川や取る海苔

しべのまづくに乗てが多くあるかいな

浅草寺の朝まゐり歸り車にのりの道ひうる、客もひ

く車夫も共に輪廻の物がたり

三筋の糸の柳はし引にひかれて行く客ハニヤンとも

官ともまうらあひ猫言ばかりを言て居る

○隅田の夜景

岸に錦を織あして朧にうつる月るげの水に流る、花

あかりいと床しさの船の糸竹

○千歳

幾世變らぬ二世の縁つがひ放れぬ鴛鴦の静き浪に千

代八千代おさまる御代に長生へん

○春の朝日

春のあはみに花が咲く長閑き空に浮れつと向ふをみ

だの花の里おさまる御代ぞ目出たけれ

○女生徒

袴も靴も男の子等と差別あきまで雄しきり同權論と

もろ共に履ちがへたる物あらし

○酒

李白や如何に嗜みけん東坡も醵を酔ひつらん只ほど

くを守りてぞ愁ひを拂ふ玉箒

○新柳

るすうに見ゆる玉すだれ清き流れに掛出しの霞を掃

ふ琴の音に思ひ床しき糸やあざ

○夏の暮

夏をふかくも八重むぐら茂れる宿を訪ひくれは朝風
すくしくある儘に秋まつ虫の音にぞ鳴く

○まふみ舟

顔の見へねど手弱女の袖の薫りぞ忍ばる、月の覗く
も恥かしと簾おろせし納涼ぶね

○時鳥

まど寐もやらぬ床のうち枕に響く鐘の音もうつ、心
に短か夜を忍び音に鳴くほと、ごま

○團扇

團扇片手に襟先に立たる妹が柳腰見あぐる空に三日

月の輝にをしてもさよとせばや

○一口のあじ

○此港の西海の咽頸だどねへ「ナ」ニありべだ

○アイルランドの何を國だらう「英」國ぢや

○叔父さんチヨイと「甥」あんだ

○十銭のお餘銭のお錢であげまを「銅貨」お願ひ

○この魚の腐敗て居るから一寸食て見たまへ「まる」ほど此

奴ア鯛變だ

○演説會の傍聴の人込で熱あう「ナ」ニヒヤク

○本願寺のお札の賣る事一月「あ」んまいだく

○今たてるから一寸「抹」茶

○目から出るもの「涙」だ

○木挽が材木の伐り口へ手を挟んで「オ、板
 ○早く飲んで献盃
 ○この太鼓の宜おどがするだらう「あるほど
 ○赤ン坊を負ッてさすに「妙だらう「子を守り傘だるら
 ○時「鱈さん此度駿河の興津と蒲原から友達が来ると云
 ○ふが誰だらう「夫の鮎鯛
 ○此画のどうだ「此奴アうめ
 ○此人の此間の火事ゐら大層お酒を飲むねへ「焼けたら
 ○夫を張て何「まるのでス「何にしやうと扇にお世話
 ○あの扇の切れたぜ「ソラ飛ぶ
 ○今買って来た茶碗のどうした毀したあ「夫の仕舞た
 ○床に立掛てあつた鳴物をツイ倒しました「夫りや琴ど

○開化しても田舎の屋根の毛あい
 ○どう見ても彼の支那人だぜ「舞へねへ
 ○ジン「く「ピヤを製造するに「酒石酸の外にまだ薬がは
 ○いる「曹達
 ○あぶあいランプを廢して「行燈
 ○爺さんが子供を見失ッて「孫
 ○娼妓が病院へはいつたぜ「また検査
 ○隣の盲目先生に金を借たら利息が三割だ「夫りやア按摩
 ○利高い
 ○秋にあると稻が俯むいて招いて居るぜ「垂穂
 ○雨天の日の太鼓の音も「曇
 ○姉さん彼の青い草の何と云ひ升へ「ある

○この煙草の宜處が一分しか無いぜ夫れだから粉九分

○七曜文字讀こみ發句

日表お家根に猫おく小春かお
月影に犬の吠たる案山子かを
火を焚た跡だけ薄し今朝の雪
水あれの崩れ堤やさきりくま
木枕の痛さに聞や鹿の聲
金箔の佛具尊としほうねん講
土くさい茶も愛さうや蔦紅葉

日 月 火 水 木 金 土

○花づくし狂句

美く見へて羨ましいが他所の花
繪にの美し真の海士の見ぬが花

甘久檜織
沙風遊色

泥的の這入るもしらす寐いり花
色もまた香もよい物の茶の出花
激戦のしら刃の中にあちる火花

若井夫婦
鬼茂十七
蠟名琴也

○ふる盡し當世の姿見

ふるくくく何をふる練兵指令の旗をふる洋犬
いふぎけて尻尾ふる高帽長髯利功ふる生徒の無
暗に開化ふる料理屋大抵西洋ふる帆前の航海日
敷ふる下戸の頻に徳利ふる上戸の汁粉でかぶり
ふる助的いつでも娼妓ふる無禪の織公アラとふ
る坊主の説教あたまふる耶蘇の教師の高尚ふる
新板あれども種い古神樂のビードン鈴をふる夜
店の安物買かふる山出した三をふる身代限

りて槍がふる。流行の藝者の纏頭がふる。袖ふる尻ふる。頭ふる春雨ふる日にふる机ふる筆ふるツて智恵の袋をふるい出したの先づこんなもの

○世間不通新燕字

外雨	雲九海	早養角	草坡	富士	群	壯煎	鴨海
(涎)	(着物)	(澤山)	(獨樂)	(耐)	(粟)	(權)	(糸)
外所のヨ五月雨のダレ	雲母のキ九十九のモ海苔のノ	早良のサハ養父のヤ鹿角菜のマ	煙草のコ娼妓のマ	富士のフ勿采のナ	平群のクリ	壯坊のカ煎海鼠のイ	鴨脚のイ海嶺のト

代摸	主心	元日	疏日	羊足	近小日	木知合	足納	鈴鈴	小大	雲雨	今望
(手紙)	(紋所)	(書)	(馳)	(岩手)	(大坂)	(徳利)	(棚)	(股引)	(綾)	(日暮)	(子持)
酒代のテ相摸のカミ	主水のモン心太のトコロ	几良哈のオ晦日のゴリ	疏黄のイ朔日おタチ	羊躑のイハ百足のテ	近江のフ小夜のサ三十日のカ	木賊のト蜘蛛のク百合のり	足袋のタ納屋のナ	五十鈴のズ蜻蛉のボ胡蘿蔔のン	小豆のフ大和おヤ	雲雀のヒ時雨のグレ	今年のコ望月のモチ

京 遠

南京のキン遠見のヘン

○新撰軍歌の口真似

ね、しんき

月日たつのは、さて早く、掛取人を鬼のこと、思ふ節
 季の、近よれど、當あき金に、氣をふさぎ、蒲團か
 ぶりて、遠縁の、才覚出るを、寐て待てど、果報とこ
 ろか、隣から、平味餅さへ、呉いせむ、只くれるの
 の、煤掃の、煤のほこりと、借金の、書附ばかり、苦
 々し、せめての事に、一合を、あをる玉面の、附あら
 ば、酒の憂ひの、玉簪、腹ご、ろ、吞たきを、堪へ
 て寒さ、凌がんと、八里半分、生焼お、芋にて腹の
 はる待て、あびしかりなり、お、しんき

○實誤教

鼻高きが故に貴からむ
 力あまるが故に貴からむ
 猫は是れ一時の權
 鬚は生ざれば威あし
 猫粧はざれば艶あし
 一月の給を盡るとあり
 千圓の金を積と雖も
 勤定常一足む
 國許を察する一違あらむ
 止宿日日、に易へ
 仕ふる時之を思はざれば

鬚あるを以て貴しとす
 線あるを以て貴しとす
 鬚減まき即ち共に減ま
 威あきを小使と爲ま
 艶あきを小三と爲ま
 猫的の籠に盡るとなし
 一宿の料に如む
 時、借金を爲ま
 妻子を乾物と爲す
 鬼神夜々迫る
 現今後悔をもと雖も

尚ほ金主ある無し 故に無頼にして後者おし
 ○骸骨の三絃を弾づる圖に題せる歌
 昔し／＼のむかしより馴れ馴れたる煩悩のその御心の
 やまぬゆゑ三つの界をはおれ得をまた慾界の末の世
 に生れさんした主ぢやもの穢れ不浄も知らばこそ當
 たらぬ身をあてと見て迷はしやんすい道理ぞとしや
 思はぬて無ければとも今にも消ん陽焰の果敢あき身に
 て春の夜の假寐一結ぶ夢よりも短かき契りせんより
 の主も妾も諸とも今今の浮氣をたしなんで稽しのほ
 どを平抱したる朝夕に後の世の經營事一精出して在
 所に御坐る彌陀さん一お願い申し故郷へ歸つた上で
 添ふなら男おあごの差別あく三十の上ニツてふ好

あすがたふ六通も自由自在あ身とありて観音様や地
 藏さん性の知れたれ方等のお世話にありて日々を樂
 一暮した其上一お前百まで私や又た九十九までと云
 ふやうあ短かい鏡を事ぢやない幾万年の後までも變
 らぬ中とあるのみか平生ふも業とて玉の林の花
 見やら寶の池の船あそび造作のいらぬ飯たべて自然
 に出来る衣を着て琴のしらべや笛の音お舞を舞ふや
 ら歌ふやう又砌に咲き揃ふ玉の蓮の華摘て神通と
 やら云ふ籠お氣儘一乘て遠近の四方の御國の佛様お
 お上申し一參つたり又無生の定入りおもふ事さ
 へ退ぞかぬ身とある事を樂みふ今日か明日かの程と
 ての本にさだまる事もあき風さへ待ぬ白露の散る間

れ事の免も角も縁ふ任せて一筋ふ故舞は御坐る舞様
の御名を唱へて詠さんせ假令ひお前ふどのやうな深
い罪科あるとてても可愛とおもふて御坐んまゐる御慈悲
の深い御心ゆゑ許して迎ひにお出るに實間違ひの無
いまゝを浮れ出でたる極樂の故舞へ歸て舞さんの跡
目相續さんしたら私にも無明の名を改めて即ち明とあ
るから本より合した胸と胸心の一ツ二ツない三ツの
身なるも四ツの徳十の力もあるあれば上の有頂の雲
の上下の無間の底此ふ憂ひ苦しひあつたあゝ五衰の
腦み四苦八苦瞋意の炎ふどきの聲愚痴嗔のあつそ
ひや飢渴のあげき血の涙氷の海や大紅蓮劍の山か火
の車廻りめぐりて世を渡るその人達を救ひあげ今の

苦勞の數を昔し談しふ仕やうあら嬉しい事であら
うぞや君

又も聞く人の衰きをいつか我

あわれと他所は人の聞くらん

○戯れ文

見渡せば柳さくらをこまかせて都ぞ春の錦ある園生の中
に色さへし小町櫻か海棠の小雨ぬる風情ある香りゆ
かしき面影とちると見染し戀衣きつと馴れしよしもがふ
現ともあく幻しの忘らう事もかた糸のもつれくて寄る
邊あき思ひを誰かしらぬ火や千々に心を筑波山つきぬ思
ひのいとく猶まを穂のすゝき穂に出てはちを硯よながし
まの心を推し玉くしげよしや百年ちぎらぬもせめて一夜

鴛鴦の雙ひはあれぬ下紐のとけて流る、戀の道語るともあき曉きふまくらへ歌く鐘の音これぞ胡蝶の夢あるか現よや浮世の花と風

○某妓ふ代りて遊客の弊風を述ぶ

近ごろ妓流の様を評しあへる者口を開けり今日の妓流の昔日の妓流より劣れるを説きて頻し妾あつとを責め侍れど是れ総て妾あつとを罪にのみ候ゆを客人たちの罪も多なるべけれ今おもひ出たる事どもを書きつけて世の粹ある人の教と請ひ待るにまん
古きころ白拍子と稱へし時の申ままでも無き事にいへどもまだ明治になり侍らざる先つ頃までい寛客の藝妓を招く者の真に藝を買ふ事にて京都あつとにてい古へ白拍子の餘

風を帯び客人より何れの技よても望まれるれば下方を慕ひ道成寺にもまれ安宅にもまれ其装束を爲してあつばれ一場の歡を整へざれば藝妓とい申さきいれを我が江戸にても亦たそれく藝妓は務めをなさざれば藝妓の間に立つ能のざりし取わけ大商などの藝妓を招く真に正しき者ふてありしと此事妾あつと頃より聞き侍りぬ妾不幸にして妓籍ふ入る時も藝妓の藝あつとて能のさる事とかもひ効あがら下方よりそれくの技も習ひいひし此くなればこそ巧拙の多少いべけき一通りの事の皆知り居りいあれ去るに近き頃の寛客だちの自ら愛しみ賜ふの妓より外は別下方あつと集ふて技を演るの申すまでも無く何ほど藝なくとも少々の姿色あるものにてよなき妓と譽

て歌を唱へ絃を弾むる事少あしと責れど今の客人だち妓
 の能く歌を唱へ絃を弾むるを見れば歌よりも話しを爲
 こそ宜けれ絃よりの杯を侑めよかして自ら歌と絃を制
 し賜ふもの多し勢ひ自ら藝妓をして絃を取るを慵きに到
 らしめむるを得ざるべし今の妓の多く淫猥ある都一
 三下りあとのみ唱へて一曲のきまりたる歌を唱ふる者少
 あしあど責め待れど是れも亦た客人だちの淫を旨とする
 者多く且つ何社の主何街の長など申す方々の多く九州
 四國の鄙人にて土唱の歌ふ所か鄙俗の唱ふ所の所謂クヤ
 くあれは上品の歌など歌ふては更に解する能はむ却ツ
 て不興よも成り候へば已む事なく淫猥解し易き都々一三
 下りなどにて意を迎ふ勢ひにて客を樂むるの善業あれば

め稱へ何程藝あるも姿色の劣れる其技をして願われし
 めいひせ自然に藝妓の其れほど藝に心を盡さむ効かりし
 時に思ひしより近頃賓客を遇しに此まで技に心を盡せ
 しも益あかりしと思ひまゐる事も數多たひひきかゝる勢
 ひゆゑ今の妓が昔しの妓に劣るの客人だちの此母導きし
 にて強がち妾等の罪にひまじ
 今の妓の年稍や高きに及べば怒ちに名の消るを責め待れ
 ど是れも客人がたの然らしむる處ども申さへければ是れ
 近き頃の客人だちの座敷の面白きと取り回しの慣れ候あ
 どにの係りらむ只管少き妓にて媚び押るを愛しみ候ゆま
 稍や高年及べば名妓にて願み人稀あるに至るこ
 是非もあし動まれば今の藝妓の事に慵しく只淫猥を呈し

是非もあき事どもあり又た今の客人たちの妓を携へて遊ぶ事も貴しい風流にして所謂意氣を主としたるをれり今ふ左候はも只々金をちらし豪を賣を以て藝者買の本分と心得淫猥に失せざれば所謂馬鹿氣たる遊びよて随つて妓流をして芝居ふどの連にのみ誘ふを願ふに至らしめ湘簾を畫舫に垂れ澤田の好景を賞し芳樽を花畔に傾むけて東臺の勝地を樂む如きの夢よだも見る能はざるに至れり妾たちとて可笑くもあきふ笑ひ面白からざるは樂み飲みたくも無き酒を強られクヤ／＼の御機嫌を取よりの意氣に粹に風流に畫舫よあど粹さして仙遊をおし深情を語る如きの絶て跡あくあり候へば妓流たちも客人よ此の如く

に自然くと風俗の壞類を来し速出とさへ云へば芝居よても行を此上あき好き遊びと心得さるるに至れり尚ほ此の如き事ども多あるべけれど後日を期して先ハ筆を擱ぬあはれ世の風流を好める粹士たちに御卓説も候ハハ教示を吝みたまふお

○謎づくし

お三の縁談とかけて、赤穂義士の夜討と解く、
 心の物置で調ふ
 元天窓とかけて、十六屋の味噌と解く、
 心の刺(指)世話があい
 妻君とらけく、消防人足と解く、
 心の家事(火事)をおさめる

往來の毛新燈とかけて、聖人の教と解く、
 心の人の道を明るくする
 芝居の幽霊とかけて、盗み酒と解く、
 心のお足(お錢)が出あい
 宇治川の佐々木とかけて、筆と解く、
 心のさきがけ(先が毛)
 寄席の景物とかけて、官員さんの出仕と解く、
 心の鬮賣つて(九時打て)出る
 もトかけて、世界萬國と解く、
 心のひ(日)の下にある
 兩瑠子の時計とかけて、人力車の合衆と解く
 心の中が善く見へる

病後の亂髪とかけて、娘の初恋と解く、
 心の言い(結)たさ怖さ
 幽霊の足とかけて、貧乏の三味線と解く、
 心の見る事(琴)がおい
 節季の手形とかけて、勘平の火繩と解く、
 心の振り廻を
 天保年間とかけて、手洗鉢と解く、
 心の弘化(雪隠)の前にある
 内氣者の戀とかけて、菊翁屋の地震と解く、
 心の文(路)付て逃る
 狭客とかけて、放し亀と解く、
 心のよあい(齡)を助ける

△ 日本人の懐ろ手で歩くから冬も暖かあり
 ○ 西洋人の遊歩に犬を連れて出かけ
 △ 日本人の遊里から馬を引いて歸る
 ○ 西洋人の文高きゆゑ棚の物を取に宜く
 △ 日本人の文低きゆゑ地に落た物を拾ふに便あり
 ○ 西洋人の靴を穿くから妹が許へ通ふも嚴しく
 △ 日本人の草履を穿くから切戸より恐ぶに便あり
 ○ 西洋人の日が短かいから夜の睡言が長くてよし
 △ 日本人の日が長いから暮を待のに樂み多し
 ○ 都に一ほんよお前の盡し
 圓いお人と聞たの誠ほんにお前の團子鼻
 逢ふ度くお金の無心ほんにお前の虫が宜い

初會の頼母子講とかけて、山吹と解く
 心のはあ許りだ
 女房のちんくとかけて、港の掛り糸と解く
 心のいかりを沈めて待つ
 ○ 西洋と日本のくらべ物
 ○ 西洋の婦人の鼻が高いから權があつて立派
 △ 日本人の鼻が低いから滑稽で笑らしい
 ○ 西洋人の質屋の帳面を持つへる
 △ 日本人の地獄を買んと引手婆アを頼む
 ○ 西洋人の天道へ生れんと耶穌を尊信し
 △ 日本人の杖を持って歩くから道に退屈せむ
 ○ 西洋人の杖を持って歩くから道に退屈せむ

辛苦つくまも歌筆あまづほんにお前の練に釘
 ほんにお前の人力車虚言を言ふても乗せたがる
 ほんにお前のラム子の徳利いつもれた尻が居らふい
 ほんにお前の蓮の花よ泥に漆むよ美くしい
 羞花閉月落馬沈魚ほんにお前の蝶致よし
 ほんにお前の唐茄子治郎と云へ女が妙ふすく
 ほんにお前の私の胸を知りもまおいで無理ばかり
 新造にや惚られ年増にや好かれほんにお前の果報者
 寫真抱へて是ほと云へどほんにお前の知らぬ顔
 ほんにお前と手て手を取て歩き度どへ遊山旅
 ほんにお前の子年の生れ猫で身代限るたる
 甘い辛いを心におさめ真まお前の粹お人

ほんにお前の枝の新聞を御覧か私しの腹がたつ
 ほんにお前の旅から旅へうりまがらすの苦勞人
 ほんにお前の疑ぐりぶかい惚たに懸直があるものか
 ほんにお前の舊弊そだち野暮お中にも幾がかたい
 ほんにお前の八重山吹よ花の美ても實があらぬ
 ほんにお前と斯ある今のもとの互ひの眼の越歴
 ほんにお前が講たる浮氣私しや心の迷ひ種
 ほんにお前の采ぬ夜の寫真寐て見て樂む枕もと
 ほんにお前のお尻の白よお茶を挽のも無理がふい
 ほんにお前の石炭あぶら移つて燃つく氣が早い
 ほんにお前ば川ばた柳浮た風よもゆきやすい
 ほんまお前の機關人形かけて茶ひく人がある

ほんに前夜の光の玉よ私しが身よまで増す光り
ほんに前口の先ばかりお為ごるしも聞あきた
にくらしい程迷はせられた真にお前の罪おひと
切るも切らぬも自由の剣とほんにお前の無鉄砲
ほんにお前の口さき上手私しも初めの真に受た
かたい約束石山寺もほんにお前の秋の月
寫真とり出し惚くをがめほんにお前の意氣お人
○都一志ばし止たき盡し
我をよされて格子をたき、き轄しとめたき彼の車
まばし止たきアノ人力車、たかそふかと思ゆる、
舊弊らしいが禁厭しても轄しとめたき主の酒
まばし止たき流れの知らせ待望月日のたつ質屋

まばし止たきお前の浮氣私しや任そ氣添れる氣
返さじやあらぬと思ふちや居れど轄し止たき今朝の雲
轄しとめたき彼の梅が香を風の邪戸をる聞の窓
轄しとめたき心の底を涙とる人さへ無い一座
つもる話しも早やむら消の志むしとめ度春の雲
まばし止たきとめ表向き蔭ぢや箒を立て居る
しばし止たきアレ彼の舟を吹て走らせ風の神
轄しとめたき心の中を人目あるゆゑ歸そ義務
しばし止たき氣をとり直し無理に歸そも主の爲め
轄し留たき心も知らで月に素氣おいほと、さそ
白む東に燈をかき立てしばし留たき彼の時計
るぞみ引く夜の弓張月をしばし留たき花の上

主の迎ひの車に乗たがしはし留たき今朝の雪
 しばし止たき彼の明の鐘残る話しの盡るまで
 轄しとめたき心もしろを時を限りて漣車に出る
 轉る地球に錨をおろし轄し止めたき明の空
 月夜がらそと云ひまぎらして轄し止たき朝歸り
 空の雪だし話しの残る轄しとめたき此方の人
 昇る旭にふくろを被せしはし止たき春の雪
 しはし止たき其原因の主のお金が欲しいから
 忍び逢ふ夜の猶ほ一入に轄しとめ度き列れ除
 利揚らしないが番頭さんよ轄しとめ度あの子
 私しや惣五の女房ぢや無いが轄しとめたき雪の装
 月の雲間を漏れ出るまでの轄し止たきほと、ぎそ

轄しとめたき心の中を明て云はれぬ今朝の首尾
 轄し留さきお前のそがたガラスの寫真を取るまで
 無理を首尾して逢ふ短か夜の轄しとめたき明鴉
 旅のお客と知りつゝ、馴染み轄しとめ度歸る戸
 麻酔の薬を時計に飲せしはし止めたき明六時
 轄しとめ度き流れの一葉何か趣向の浮ぶまで
 最早六時と空うちながめ轄しとめたき明け鴉
 ○都々一積りくゝて盡し
 つもりくゝて溜つた口説何の業書で問合
 つもりくゝて仕立し着物浮氣にされての妻合ぬ
 あと引上戸とお前の口説つもりくゝて又と始め
 逢ふて言はふと思ふた事をつもりくゝて皆忘れ

なびく心の弱竹あれどつもりく〜て雪とねる
今ぢや後悔ツイ飲む酒がつもりく〜て二本杖
廣々にあらぬが病の下字つもりく〜て積とある
主と私しり降り来る雪よつもりく〜て深くある
是サ大屋さん掃溜御覽つもりく〜て山を爲そ
私しやお前の女房のつもりく〜て此ごろ針仕事
初め一夜と二夜と三夜とつもりく〜て後四の五
チラリ〜と降る雪でさへつもりく〜て銀世界
逢たさ見たさが五寸と五寸とつもりく〜て尺と成る
一筆示さど書たる文がつもりく〜て千話とある
主を歸さぬ謀計の雪がつもりく〜て深くある
つもりく〜て云ひたい事も逢は嬉しくどう忘れ

口で言はれぬ苦勞が胸につもりく〜て癪とある
つもりく〜てつもりし苦説雪見炬燵でツイ解る
一間眞寶庭ふり雪がつもりく〜てあけがらそ
晦日〜と書ふのがつもりく〜て憂世の鬼とある
託つ涙と質屋の利息つもりく〜て又た流さ
○酒器歌こみ都々一
安普樂かひたるお客の前へ徳利や袴で罷り出る
杯洗の水よしつんだ盃よりも浮む瀬のあい永年寺
銚子狂ふた心の駒の猪口あお前に素がまゐる
私しや徳利よく爛つけて主の銚子よ乗りせぬ
酒の世に云ふ氣違ひ水よ飲ば銚子が狂ひ出さ
腹よ寶のあい歌筆さへも胸に一ツのメめ括り

私しの意見を徳利まいて、皿りと浮氣を止みしあ
 猪口く達ふ夜を一所、纏め徳利話しがして見度
 猪口で捌けたお前の銚子つぎ込む私し、無理ない
 酒の道具の爛いんさん、袴つけたる此、チロリ
 杯と私しに言はせて置てあ爛いいて、銚子せぬ
 主の浮氣を十膳箸よいつも相手の列の人
 猪口くお出よ一ばい吞うあど、上戸の友を升
 猪口どの言葉のあげ足とつてすねる銚子に障る病
 向ふ鉢まさふやけて飲む、や猪口より矢張り茶碗酒
 是る徳利思案をしあ、猪口と仕たよあ事ぢやあ
 銚子さかづき揃へて置て待て居るほど夜が長い
 猪口と古渡りつけても見たが、皿と返事の銚子地盆

猪口を席へもしらつめうしく袴きて出る爛徳利
 ○冠りづけ狂句今あらへ

- 今あらへハシモルヒ子買ひ求め
- 今あらへ五條の橋でつかみ合ひ
- 今あらへ義士ビストルを腰ふつけ
- 今あらへ勝頼の像寫真あり
- 今あらへ惣五不服で大審院
- 今あらへ一カの軒つりランプ
- 今あらへ忠兵衛のこす五十銭
- 今あらへ菊萱妻に見付られ
- 今あらへ巨勢の金剛あぶら繪師
- 今あらへ茨城シヤツボひつかみ

- 今あらば七分署へ自首を爲し
- 今あらば後寛あかい土かつぎ
- 今あらば政岡パンを買ふておき
- 今あらば曾操の舞目に立す
- 今あらば蘇秦代言の試験うけ
- 今あらば張良きつと狙げき銃
- 今あらばお安分署へ願ふとこ
- 今あらば弁慶圖引器を懐中し
- 今あらば才三斬髪かりふ爲り
- 今あらば正宗のよいサアヘル師
- 今あらば平作車ひくだらう
- 今あらば廓巨遺し物ひろひ主

- 今あらば王仁の雇教師あり
- 今あらば稻川母衣から禮を云ひ
- 今あらば判官師直にむしりつき
- 今あらば頼政ピストルでぬえを打ち
- 今あらば大黒のまぐ山の神
- 今あらば源藏私學教師あり
- 今あらば荒木の仕込み杖を賣り
- 今あらば貢ぎ查公もチトの傷
- 狂句邪広ふされ盡し
- 晝ひかるランプの兎角邪広にされ
- 花を見し戻り歌の邪広にされ
- 前妻のこぶ後妻の邪広にされ

○布施もさぬ和尚地獄で邪魔にされ
 ○出来て仕舞と媒人の邪魔にされ
 ○大黒の間夫出采和尚邪魔にされ
 ○相乗のお三の尻を邪魔にされ
 ○乳母千話抱た小兒が邪魔にされ
 ○若夫婦いつも姑の邪魔にされ
 ○夕立がえれて傘邪魔にされ
 ○梅咲や炬燵のいつか邪魔にされ
 ○店さきに電信ばしら邪魔にされ
 ○白兎に裏川岸の犬邪魔にされ
 ○別墳の持たる傘の邪魔にされ
 ○世話のききの姑嫁に邪魔にされ

○重箱の花看歸りに邪魔にされ
 ○羊毎に出され古雛邪魔にされ
 ○お手飼の猫の家令の邪魔にされ
 ○氣の利かぬ亭主女房の邪魔にされ
 ○割前の持ぬと見たて邪魔にされ
 ○狂句すかぬをす盡し
 ○すかぬを歸れば鼻のふくれ面
 ○すかぬをランブ頭で各番ぼり
 ○をかぬをす顔の杓子で尻の白
 ○すかぬをす怒張のうへ意地きたあ
 ○すかぬをす瘡氣うぬぼれ然して悟
 ○すかぬをす障れば落る漂白髪

○まかぬえを客齋始に派手お家
 ○貧書生ねこや狐のまかぬえす
 ○まかぬえを甚ばりの上しとい客
 ○舞むしやの人の小猫がまかぬえを
 ○狂句下女おもひ盡し
 ○少輔を酒屋あると下女おもひ
 ○裁決を女房の尻と下女おもひ
 ○書記官をあつさ寒さと下女おもひ
 ○禁獄を近ひ國だと下女おもひ
 ○傍聴を勝手道具と下女おもひ
 ○判任を宿の亭主と下女おもひ
 ○航海をあとの悔みと下女おもひ

○大臣をむらの長者と下女おもひ
 ○古事記をバ物もらひかたと下女おもひ
 ○三府をバ子を産だのと下女おもひ
 ○迴文狂句
 ○池の端に草花咲く庭の景
 ○櫻のみ詠むる無雅お身の樂さ
 ○羲の辛苦帝王置いて君子退き
 ○池のどか柳よき名や門の景
 ○實体よまねをくすねをよい丁稚
 ○待つむだ寐靡を惡く妬む妻
 ○今朝何如留主を苦にする迎い酒
 ○支那もみな和に歸じ氣に涙もまし

○よき友の親しく仕たし派も時世
 ○くやの事喜助の消す氣床の役
 ○支那で李氏用ゐる位置も死ておし
 ○權太坂休み見すや笠團子
 ○怠慢坊主の數のるんまいだ
 ○伊丹酒樂座で櫻今朝見たい
 ○痴の体を悔むも無益老て慢ち
 ○罪人を活して四海落し水
 ○三田の伯蓋糸の審査桑の民
 ○支那皇國親しく仕たし惡み無し
 ○肉の身かそれが穢か神の國
 ○櫻の詩忠よ義よ内士の樂さ

○今朝の庵吞む積善の老の酒
 ○智が基軸車で丸く挫き勝ち
 ○川の名の鴨として友か花の和歌
 ○また明ひの年とる同士と兀あたま
 ○松の元出れば呼ばれて友の妻
 ○願のくゝ慈家惠めかし湧の金
 ○二ツ三ツ四ツの狂歌
 ○隅田川ふねのあかにも清元の
 ○泥水をまました顔の賣れ残り
 ○れ玉杓子が二ツ三ツ四ツ
 ○朝寐する口どたへする浮氣する

○ 驛ア、拳固ニツ三ツ四ツ
 ○ 何だか痒れ古橋絆
 ○ 道理て虱ニツ三ツ四ツ
 ○ 掘中のこりの上へ子供等が
 ○ 扱たる石のニツ三ツ四ツ
 ○ 追えれても日向ひろふや冬の蛇
 ○ 馬の尻尾にニツ三ツ四ツ
 ○ 約そくの友待遠ふに箱や寒き
 ○ フツとくさめがニツ三ツ四ツ
 ○ 御馳走の芋がつかへて咽せ反り
 ○ 拳を脊中へニツ三ツ四ツ
 ○ 手ふ入れんものをと寐兒に戯し付て

れものを玉がニツ三ツ四ツ
 ○ 憚りて書ぬあたり新聞
 ○ かもこのニツ三ツ四ツ
 ○ 春采れハ屋根や庇や物干
 ○ 戀する猫がニツ三ツ四ツ
 ○ 何を種とて庭やつくらんの上の匂づけ
 ○ 舌を抜く間魔ありと知りながら何を種とて庭やつく
 ○ 居あらびし満座の中の宛發ハ何を種とて庭やつくらん
 ○ 無い事をこしらへて書く千話文ハ何を種とて庭やつく
 ○ らん
 ○ もの前のお茶ひき女郎客を見て何を種とて庭やつくらん

○白づねみ帳面にまで穴をあふ何を種とて虚やつくらん
 ○道わたへした小便を咎められ何を種とて虚やつくらん
 ○ツイそこがツイ吞まぎて朝返り何を種とて虚やつくらん
 ○辻易者つくゑゝ算木れきあらべ何を種とて虚やつくらん
 ○吉原の土手で親父にゆき當り何を種とて虚やつくらん
 ○寐兒えらみ誰と當とん父あし子何を種とて虚やつくらん
 ○時かけた話しの草の尻がそれ何を種とて虚やつくらん
 ○行き先もつぎ留れいた是れ息子何を種とて虚やつくらん
 ○かへり車北の淺草南芝何を種とて虚やつくらん
 ○野間のおれ座敷へ招れて何を種とて虚やつくらん
 ○あいた口鎖ぬ御代の談し家何何を種とて虚やつくらん
 ○生口もまた死口もよする巫女何を種とて虚やつくらん

○後べりらツイ刺て采る化の皮何を種とて虚やつくらん
 ○女房に袖の移り香どがめられ何を種とて虚やつくらん
 ○須彌山や高天が原の誰が見し何を種とて虚やつくらん
 ○歐羅巴見て采たやうあ青書生何を種とて虚やつくらん
 ○極樂を見て采たやうあ御説教何を種とて虚やつくらん
 ○大三十日欺しおふせて又た節季何を種とて虚やつくらん
 ○懸とりに一度どころか二度三度何を種とて虚やつくらん
 ○論よりも証據見られた色の文何を種とて虚やつくらん
 ○轉んだる証據に腹へ溜が出采何を種とて虚やつくらん
 ○まくら邊へ石炭あぶら益されてブンを采る香に寐て
 ○居られむ

○いん居さん朝看經の香烟りブンを采る香に寐てり居られむ

○居候餅や焼かど頭あげブンを采る香に寐てり居られむ

○晝寐をる枕邊ちかく汲む糞のブンを采る香に寐てり居られず

○公園にちらく梅の裾もやうブンを采る香に寝てり居られむ

○春雨や梅が谷間のうやひそもブンを采る香に寝てり居られず

○枕邊で牛肉鍋がにへかへりブンを采る香に寝てり居られむ

○夜の間梅の吞口づぼぬけてブンを采る香に寝てり居られむ

○雪總の戸の明け放し風あふりブンを采る香に寝てり居られむ

○吸ひ売の飛だ粗相を枕もとブンを采る香に寝てり居られず

○附ひもの燻る匂ひに置き巨燵ブンを采る香に寝てり居られむ

○足のばき巨燵に足袋の紐とけてブンを采る香に寝てり居られむ

○待かねし梅の朝日に綻びてブンを采る香に寐てり居られむ

○蚊帳をつる程に無いと思へともブンを采る蚊に寝て

○ 春さぎて夏つる蚊帳を質にかきアンをと来る蚊に寝ての居られむ

○ 損料の蒲團小便しみまたりアンをと来る香に寝ての居られむ

○ ほころびし梅の隣か我庭かアンをと来る香ふ寐ての居られむ

○ 枕邊でまた始めたる小鍋だてアンをと来る香に寝ての居られむ

○ 裡寝のそばで始める酒のかんアンをと来る香に寝ての居られむ

○ 雲はれて月さへ渡る夜の梅アンをと来る香に寝ての居られむ

○ 久方の光り長閑けき春の日に湯文字はづして半風子とる驛

○ 是やこの行も歸るも別れての知れすまごつく辻の迷ひ子

○ 浪花がた短かき芦の節の間も待れぬものゝ漁車の制限

○ 月みれば千々に物こそ悲しけれ高い利息の勘定をして

○ 人もうし人も怨めしあトきおく振られた床に夜を明まどは

○ 淋しさに宿を立いで眺むれば浦山しくも寐兒の合衆り

○ 夏の夜はまだ宵あがら明ぬるをいづち行きけん相方の

○ 山里の冬ぞ淋しきまさりけり枯木の雪にからき二三羽
○ あらざらん此世の外のおもひ出に今一たびと隠居口説

○ 廻り逢て見しやそれとも分ぬ間に早や行き違ふ満車の
往返

○ 春まぎて夏来にけらし白妙の氷々も賣れぬ秋かぜ
○ 采ぬ人をまつほの浦の夕風にあげた簪た、み算かま

○ 大江山生野の道の遠けれと二銭おごれば届く郵便
○ おもむあひ扱も命のあるものを二人死ぬとい馬鹿の親

○ 戀さてお我名のまだき立にけり二人が中の今日の新聞

○ 休らはて寐あまじ物を小夜更てあんまの笛に淺草のか

○ 終夜もの思ふころの明やらでまつ相方に出る欠伸かあ
○ 人のいざ心も知らむ古さとの今日が草かり明日が種ま

○ あげきつ、一人寐る夜の明る間に出した女房に詫も云
ひたし

○ 高砂の尾上のさくら咲にけり明日のとうだと誇ふ連中
○ 奥やまに紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲きく里もひらく學校

○ 瀬をはやみ岩にせかる、瀧川の流る、如き軍書講談
○ 契りきあかたみに袖を絞りつ、空泣をして歎す女さつ

○百人一首上の句づけ
花魁に振れたあとが行燈部屋猶うらめしき朝ぼらけか

○小娘のうちから好む寄席芝居身のいたづらに成りぬべ

○國の爲と云ひあがら打たれにし人の命のかしくもあ

○お多福の地獄の客もあく更て傾ぶくまでの月を見しか

○言ひよりて刻つけられし其後で甲斐あく立ん名こそ惜
しけれ
○聞てさへピツクリ支那の大飢饉人目も草も枯ぬとおも

○横町の寐兒がお髻に見そめられ戀ぞ積りて扶持とあり
ぬる

○あか髻と南京坊主川へ落ちから紅に水くさるとい
○樂みにして待つ二度の蕨入の如何に久しき物とかいし

○添れねば互ひの尻に帆をかけて行衛も知れぬ戀の道か
あ

○煮賣屋の鱒の桶におどりても今日を限りの命ともがあ
○肉食が閉けて采たて今早や山の奥にも鹿ぞあくある

○私窩敵を安いあそびと思ふよりしづ心あくはあ散る
らん

○猪食た報ひゆゑだにあきうめて人を身をも怨みさら
 まし
 ○急ぎゆく路の真中の丸木ばし身を盡しても越渡るべき
 ○勉強をした熱しの現れて今日九重一匂ひぬるか
 ○足びきの女郎買ふ錢のあくありて長々し夜を獨りかも
 寐ん
 ○氷うり聲の昨日とおもひしに衣き今年の秋もいぬめり
 ○米どむぎ稗さび出米ぬ山里の粟てこの世をすごしてよ
 とや
 ○花魁ふふりつけられし和尚さん衣かたしき獨りかも寐
 ん
 ○やあざ原旦那今ばんお安くと我ころも手の露にぬれつ、

○名も高き黄金の銃の雨ざらし濡にぞぬれし色の變らト
 ○しん猫ふ話そ坐敷の線香の長くもがあと思もひけるか
 ○瀬戸もの屋粗相ガラく 皿小鉢碎けて物をおもふころ
 哉
 ○小便の仕たし便所の見當らず翼ち顔ある我があみだか
 あ
 ○言たての面白さうを機關に乙女のまがた替しとめん
 ○妾宅の出米た話しが耳に入りさしもあらじあ燃るおも
 ひを
 ○植木屋が知らぬ他國へ出掛れば花より外に知る人いあ
 し

○唐紙の下ばりに見る古式鑑おほ餘りある青しありけり
 ○邂逅に遇ふ夜半の話し盡やらで傾ぶくまでの月を見
 しかお
 ○少將の九十九夜まで通ひけり今一度で逢ふ事もあ
 ○汁粉もち残して置かたくなる餘りてあとか人の戀し
 き
 ○はるくの道をざとりの獨り旅人こそ見へぬ秋の末に
 けり
 ○横鼻禪を垣根へ干てツイ忘れ白きを見れば夜ぞ更にけり
 ○大晦日かけとる人の口小言烈しかれとい祈らぬものを
 ○結ひ立の髪で枕をおつむづし亂れて今朝の物をこそ思
 へ

○歌がるた争ふ袖のはあ紅葉むべ山かぜを嵐と云ふらん
 ○電信も郵便もあきはあれ鳩人傳あらで云ふよしもがあ
 ○地口
 題 人間萬事塞翁の馬
 ○日本萬事西洋の真似 ○瞬間萬里電報の妙
 ○建言萬事採用の有無 ○三絃雜事當節の摘
 ○一戰萬死大砲の玉 ○金錢暫時借用の窟
 ○電信便利西洋が基 ○近年雜事商法が隙
 ○心願成就奉納の繪馬 ○死ての亡者大王が前
 題 圓い卵も切よで四角
 ○擬製珠でも器用で驚ぐ ○孫も息子も能く似て吝く
 ○脆い萬古も持様で長く ○強い角力も取様で互角

○ 無地流行れば無地を織り流流行れば綿を織る
 題 末の野とあれ山とあれ
 ○ 炭の火とあり灰とあり ○ 末の穂とあり米とあり
 ○ 戀の顔とあれ淵とあれ ○ 死の蛇とあれ鬼とあれ
 ○ 國の能登あり大和あり ○ 好の寝て馴れ妻とあれ
 ○ 花の實とあり種とあり ○ 住の子も馴れ女房もあれ
 ○ 時バ核とあり種とあり ○ 末ののろりと妻とあり
 題 學んで時に之を習ふ亦た樂しからむや
 ○ 摘んで時にこれを食ふ亦と甘からむや
 ○ 轉んで時にこれを攫む亦た恐からむや
 ○ 轉んで時にこれを賞ふ亦た悦ばしからずや
 題 義を見て爲ざるの勇あさきあり

北の顔でも怒れば四角 ○ 悪い店子の強情できらむ
 悪い女子の着物で仕度 ○ 劣い煙艸も刺様と仕立 ○ 苦
 い勤めもさせ様で氣樂 ○ 赤い頭も月夜で光る ○ 悪い
 義子も仕様で旨く ○ 圓いお金も昔し四角 ○ 悪い
 ても容貌で好れ ○ 堅い蕾も時節で開く ○ 悪い
 離縁が氣樂 ○ 甘いお酒も吞様でまづく ○ 悪い
 溜柄杓 ○ 圓い世界も畫様で四角 ○ 鹽茶釜に切
 題 人觸れば人を斬り馬觸れば馬を斬る
 ○ 日暮れば客を取り夜明れば金を取る
 ○ 指觸れば金を取り髯落れば縁を切る
 ○ 袖觸れば袖をひき裾觸れば裾を挽く
 ○ 花開けば友を呼び友采れば花を折る

○火を見て煮ざるの牛あり
○妓を見て寝ざるの情あり
○詩を見て御座るの用あり

○馬車に別當 ○書家に筆法 ○五に七寶 ○車夫に天
○鮭に年暮 ○師家に月俸 ○府下鉄橋

○近火一々の禮 ○縣下音日の弊 ○貧家日々の病

○あるじノン氣の妻 ○味のよい味噌金山寺

○雪の旅路の先 ○明日の浪路の風

○旅の小路の聞あんと ○先ぢや孕みて物業ト

○秋の蒸氣船も風景也

○被告の方も勝次第 ○地震の沙汰も上次第

○他國の沙汰も郵書次第 ○樹木の枝の風次第

○五穀の畑の種次第 ○地口の馬鹿も書次第

○鬼の采の様に終が見へる ○奥の暗いのに白歯が見へ

○夜着の真いのに虱が見へる ○老の苦勞に白髪が殖る

○押の強ひのに白歯が避る ○軒の廣いのにフラフが見へ

題 瑟たり憫たり赫たり喧たり斐たる君子あり終

に誼るべからむ

○ 違たり取つたり借たり消たり確と印紙あり終る館

○ 蹴たり踏んだり打たり突たり二人喧嘩あり強いのに負るべからむ

○ ビツカリ金たり掛たり捻たり左りアングルあり時々忘れるべからむ

○ 大學の口真似

息學

色情苦

酒醒士の曰く息學の狂酒の愚痴にして女樂毒に入るの門あり今に於て愚人樂を爲るの奇体を見るべき者獨り此絃の轉るに頼て文育これに次ぐ樂者必らむ是に由て遊べば則ち其狂はざる無からんや

息學の道の贅澤を明かにするに在り借を新にせる不在り至貧に止まるに在り

◎ 某娘に代つて出雲神社に奉つる書

賊妾某合掌再拝慎んでお願い申し上奉つる妾思ひ迫つて恥も打忘れ胸塞がつて三度の飯も咽に下らむ春愁快々痴情に堪むして敢て神前を瀆そ神様果して靈あらば幸ひにお願いを許し此度取持の御一言を賜ふあれよ妾の元深窓の中に生れて乳母の手に長じ未だ嘗て人間の報苦を知らず乃爺さんの蝶と呼で愛し阿母さんの花と呼で寵し妾が苟くも欲する所の意の如くあらざるの無し紫縮緬の紋付を欲すれば下着を併せて直様これを仕立金綴子の帯を望めぬ直に之を購ひお召縮緬南部縮緬米澤赤織黄八丈鶴等

積て簞笥に盈つ、珊瑚の釵、鼈甲の飾、金鈿、玉簪、紅粉、香水、山を
爲して鏡臺に満つ、金時計、金指環と雖も亦た既に之を裁し
流行の品一も有らざる、無く四季の遊山も亦意の儘あら
ざる、王子飛鳥に行て以て觀楓の興を盡し、夏の納涼に於る
烟火に於る、冬の雪觀に於る、梅見に於る、亦皆お試みざる、
無し其他大師参りあり、觀音詣あり、皆お行ざる、無し然り
と雖も、タツタ一ツ心の儘よあらざる、只色の一字のみ、
兼に阿母に従つて其劇場に至り、偶く一人の美少年と一
觀棚を隔て觀る、其人や鼻高く、眼涼く、色白く、髮黒く、葉平様
の再采に非ざれば、光源氏の兄弟に似たり、妾此人を視、一視
してツツとまるほど恍々し、直に御身の爲あら、命も人らぬ

の思ひを發し、妾竊かに横目を遣つて心を通われば、其人も
亦ニツコリ笑つて、暗に信を寄せ采る、妾往て相語らんと欲
まを雖も悲しひ哉、人目の關に遮られ、空しく思ひを残して
歸る、未だ幾くあらむして、又淺草地内に邂逅を盡し、是れ觀
音様の引合せにして、宿世の因縁たる、と疑ふべからむ、妾
竊に侍婢ふ命、ト其跡を追ふて、其何人たるを尋ねしむれば、
何ぞ思はん、這は是れ、豪商某の愛子あり、妾是より眷々思ひ
を焦し、戀々胸を苦しめ、寝て其姿恍として、夢に入り、醒て
其意惚として、眼に映じ、三絃を鳴して、以て暫く忘れんと欲
すれば、足の踏む所を知らず、芝居を觀ると、雖も目に上らず
寄席に行と雖も、耳に入らぬ、身の家在りと雖も、心は常に枝

に在り遂に思ひに堪む筆を情ふて情を寫し竊に婢をして
之を彼の郎に送らしめたるに晉に妾が年十有五の春に在
り彼の郎も幸ひよ妾が心を慰諒して郎も亦君を思ふ願は
くハ竊に見相んの返事を賜ふ妾が其時の喜びハ凡そ如何
ぞや恰も枯木の再び花を開き萎れ草の再び活たるが如く
妾竊に夢に托して始めて郎と淺草地内某の茶亭に相逢
亦當時天を仰ひて共に誓つて曰く天柱折れ地軸碎けるも
此盟ひを渝ざる事お不動様の火の如きあらんと是れ清正
公様の知る所お岩稻荷の御存じある所あり妾是より心も
亦將に飛とし魂も亦た飄らんとし日として思ひざる無く
夜として夢に見ざるハ無く兩情綢繆結んで膠より堅し是
に於て妾敢て羞を忍び阿母一請ふて表向き婚を結ばんと

彼を阿母も亦喜び往て之を他謀れば何ぞ思はん他ハ是
れ相續息子にして出て婿と爲るべからむ妾も亦た相續娘
にして往て嫁まべからむ意天何ぞ無情にして妾をして此
憂ひあらしむるや妾ハ設ひ相續娘たるも彼の郎と伉儷た
る事能はむんハ何を樂しんで此世に在らんや他も亦然り
故に相携へて奔らんと欲せし事凡そ幾回ぞ又相共ハ死せ
んと欲せし事凡そ幾回ぞ妾と郎との縁ハ元是れ一幹木の
み若し之を割ば到底二人の生おきなり敢て請ふ神靈二人
の情を隣み幸ひに神力を以て赤繩を結ばしめよ神様若し
お聽下さらばんハ是れ神様が我等二人を殺し賜ふなり妾
ハ固より神様の人を殺すを欲せざるを信ず故に敢て失敬
を願みぞ謹んで願書を奉つる神様幸ひよ之をお聞届け下

され度候頓首百拜

○ペラの勢力

木葉隠士

軽し吹ば飛んと欲し裂け破れんと欲まべらく即ちべ
 ラくなりと雖も其勢力を育まるに至つて無遠無量殆
 んど人を吃驚仰天せしむる者あり天地の廣き世界の大き
 る寶貨億計濱の真砂より多く野の若草より夥だしと雖も
 然れども能く肩をべらに比まる者ハ未だ嘗てあらざるお
 り之を口に含めハ八珍膳を没し之を鼻に加ふれば蘭麝室
 に薫じ之を目に當きは美人忽ち至り之を耳に挿めハ蘇竹
 乃ち起るべらの勢力五官に試みる所猶ほ此の如し若し兩
 手に之を掴み兩足ふ之を踏み自由自在に其威を逞しふす

るを得せしめハ縦ひ精神一たび到らざるも何事か成すべ
 からざらん何物か得べからざらん醜韓公ハ之を以て揚貴
 を柳橋に擁し華嘉公ハ之を以て西施を墨江に伴ふ巨商ハ
 之を以て紳士に交り豪農ハ之を以て官吏と爲り之を得れ
 バ馬鹿も利功と爲り之を失へハ利功も馬鹿と爲り之を得れ
 姓の糞を掴み左官の土を捏ね貧賤の泥突を働らき乞食の
 門に立ち軍談師の机を敲き落語家の扇を揮き力士の体を
 肥し俳優の面を塗り洋學者の横文字を譯し漢學者の支那
 小説を點し書家の筆を拭り画工の墨と吸ひ醫者の容体を
 構へ書生の大言を吐きお一の女郎と爲りお二の藝妓と爲
 りお三の地兒と爲りお四の引張と爲りお五の権妻と爲り
 お六の洋妻と爲り曰く何曰く何と今一々これを勘定する

違あらずと雖も率ね皆あべラを得んと欲するに外あら
ざるありべラの勢力や大あり偉あり之を如何ぞ吃驚仰天
せざらんや魯褒をして若し今日に在らしめば必らずや應
に神錢論を置いて先づ神べラ論を著すべきのみ噫世のべラ
ある哉噫人のべラある哉べラあれは以て天地に横行すべ
く以て各國に縦横すべく以て日本海を埋めて鉄道と馬を
べく以て富士山を崩して上田と馬をべし豈にべラく視
して可あらんや已あらく我のべラ無し遂にべラの勢力
の説を作る

○百醉の説

狂 醉 子

人の醉や豈に止に酒のみあらんや事我を醉はしめ物我を
醉はしむ然り而して醉へば必らず一種の弊害を生ずる

昔し利休の茶に酔て非命の死を招き信長の剛慢に酔て本
能寺の變を承ま慎まざるべけんや今や醉拂ふ者昔し十
倍し其弊害を生むるも亦た昔日より夥し藝妓べラに酔へ
ば應承を爲し權助白馬に酔へば舌管を捲きお三の南瓜に
酔へば腹を下す其外華痴の權妻に酔ひ道樂息子に娼妓に
娼妓に間夫に酔ひ私窩子の熊八に酔ひ遊治郎の揚弓に酔ひ
ひ醫者の藥に酔ひ坊主の布施に酔ひ書生の洋語に酔ひ希
婆の念佛に酔ひ商人の利に酔ひ代言人の訴訟に酔ひ經
濟家の密爾に酔ひ和學者の神道に酔ひ洋學者の耶穌に酔ひ
ひ漢學者の孔孟に酔ひ宗徒の如來に酔ひ百姓の糞に酔ひ
記者の論說に酔ひ議員の原案に酔ひ金持の金に酔ひ貧乏

○野良倉生の破き衣服を着て故郷へ還るを
送る文

老 婆 心 史

野良倉子足下、足下曾て僧月照が假膝を遣つて曰く、男兒志
しを立て、脚關を出づ、學若し成らざれば、死をも還らむと
然るに、其假膝ハ女郎屋の吸附煙草と共に消て、痕無し、足下
初め漢學塾に入て、文章軌範、日本外史を讀へすと、僅二三
葉にして、早く已に遊惰生と湯屋の二階上り、阿場摩女の
弁茶羅、酔て法外の茶代を投、學資の半を費せり、機を見
て之を挑め、バ忽ちにして、彈き飛され、其怒りに乘じて、戸外
に出で、偶々引張婆アの袖を引、誘ふに遇ひ、遂に誘はれ
て、私娼を横町裏の地獄長屋に買ふ、其地娼的や、格別風姿よ

きに非むと、雖も鬼も十八にして、山茶も煎花の腰附あり、乃
ち十錢を投、て其肥脣を買ひ、以爲らく、豈ふ曰く、燈臺下暗
しと、蓋し、僕の謂る、近所、此花あるを知らせ、して徒ら
大板の茶代を湯屋に擲らし、自ら吾愚に驚けり、と是より
屢々、此穴に潜り込て、梅毒を引受け、忽ち大機根を踏出し
て、病院の厄介と爲る、其入院中、偶々同患者と室を同じ
ふ、其患者も亦放蕩學を講究するの、一惰生あり、是に於て
か牛ハ牛連れ、同氣相投して、兄弟分の交りを結び、足下試み
に問ふて曰く、君も亦猪喰ひ、否地兒的、買の報ひか、曰く、否、君
自ら恥を説、勿れ、僕の梅毒ハ、憚りながら、芳原花魁の賜の、あ
り、君の病ハ、少しく癒れ、バ宜しく、一遊を北里に試むべし、其
味ハ、豈、白鬼輩の比、あらんや、柳媚花笑、真に人を惱殺せ、且

つ君の何等の學を修むるや曰く漢學あり曰く不開化も亦
た極れり今日横造の書を讀まざる者の不具のみ書生とい
非ざるあり君斷然陳文漢書を廢してペラ／＼の洋書を學
んで可ありと足下是より洋學に入り幾本一冊を讀んで
忽ち天狗と爲つて曰く我の大博士ありと憚れむべし屑屋
に費轉そも三文の直打もあきの身を以て表印以上の株に
這着んと欲し途方途徹もなき糞量簡を起して以爲らく我
應に近く百圓給を掴むべし今其半を授けて豫め贅澤を盡
まも亦妨げあし亦是き一の學問なりと遂に衣服を典じて
北里に遊び紋切形の手管にはまり込で夢中作左衛門と爲
り又書籍を賣て遊び遊び遊び遊び遊び遊び遊び遊び遊び遊
虚言を突て不都合の錢を友人に借り法螺を吹て不義理の

金を懲意人に借り其間又た揚弓娘の手管に罹り的を狙は
ぞして娘の尻と狙ひ鈍と殊中賢す處の錢も亦少あからむ
と爲そ今や下宿料の溜つて日々に催促せられ追繰の尻の
破て時々責られ八方に借金を持へて首も亦廻らす今に
して空目的の越中禪と共に全く外れ甘んじく腰と五合米
に折らんと欲すと雖も元三文の價あきを奈何ん放蕩遊惰
の二學と卒業と雖も往て狂師となるべき處あく終一夜
遁同様將に天晴襪を衣て故郷に還らんとそ足下其心に
於て愧無しと爲そか再び手を振て晩年を送るとい其活智
あきも亦甚だし哉而して斯の如き頼り足下のみあら
む書生の七八の斯の惡結果あるを以て常と爲そ因て一針
文を與へて以て足下に倣ふ者を戒むと云ふ可々

◎文句入り都々一

○立手をおさへてマア待たしやんせ
葉うた「どふでも今日い去んまかと云ひつゝ、立てれん

ト窓障子細目ふ引あけて
しばし留たき今朝の雪

○花と名のつく氣樂も身でも
景清「人よ知られし景清が五條坂のうかれ女よ心を

よせしと云ひれてハ弓矢の取と速慮がち
少しの遊びを止しやんせ

○雷につれて降り出さ彼の夕立の
小簾の戸「瀧にうれしき男のカジツト手に手をまんれ

も云ひを二人して釣る蚊帳の紐

はれて嬉しき月の顔

○神をたのんてお前のみくド
お七「ちくさ結びを二度三度結びおあせし嬉しきお

私が紋のかんざしへ
吉と出てさへうたがはれ

○河の因果てナゼ此やりに
浦里「逢ふた初手から可愛さが身み深くと惚抜て」

ほんゝお前の罪お人

○逢ぬむかしとあきらめおから

「真成薄命久尋思。夢見君王覺後疑、

夢見りや若しやと氣が揉る

○月夜がらそにフト目をさまし

「双枕寒夢不忍別。情人歎送風風。叙

あれ何時か鐘のこま

○飛かふ燕がやあざにとまり

「帯かくさる、戯れも憎ふらあらぬ移り香の

色にうかれて又たくるふ

○何を苦にして欄干にもたれ

「女兒江北住江南。半帯橋蔭半帯愁

花に露もつ袖がうら

○宵の氣やさめ誠とおもひ

「長明」其處のおけさるに異ふこと云はれ寐まり寐まら

ぞ待あかさ

獨りて悔しい明の鐘

○日ましに窮理の聞けるけれど

廿四孝

「回向せうとてお姿を繪に書せしめぬもの

を魂ひ返そ返魂香藥の力もあるあらば可愛

とたつた一言の

○外に心の移りしおまへ

「夫ほど私しが嫌あらば獨り未采へ行てみや

男心のさうしたものは

見せてられても忘られぬ

○ひと目はかかると二人の中

「るくせと色香梅の花

いつか他人にかざ出され

○口ぢや云はねど心てとめて

「屏風一重の其方にいまだ睡言の聞ゆれと我
の見たらぬ夢を裂き

氣づよく歸きも主はため

○おもひ叶ふた二人の中

「與君相向轉相親。與君又樓共一身」

天下暗ての自主自由

○それと言はねと音じめに寄て

「その色糸の音に通ふ琴の松かせ松ハやし

たれに心をつくしごと

○待ばまつとて更ゆく鐘を

「玉界、夜色涼如水。俯見牽牛織女星。

○無理を首尾して逢たも何時か
獨りかぞへて物あんじ

○二年宇治の螢がり焦れ深たる戀人と語らふ
間さへ夏の夜の

駐かしいほと世帯じみ

○愚痴をこぼさむ一杯のみ

「勿思身外無窮事。且盡樽前有限盃。

飲ば浮せ何のその

○今日の土曜とて、ろて待て

「君采ぎの寝屋へい入す涼の戸へ出てい歸り
くてい

獨りくよく蚊帳の中

○橋間はしまをれ合あひ小こぶねと小舟こぶね

「吹かよ川か風かぜあがれよ簾すだれ

主ぬしの聲こゑかど胸むねさあざ

○おもひ届とどいて嬉うれしい夜半よなかと

「ほのくくと雀すずめ響なづる奥座敷おくざしき燈火とうかしめを男おとこど

も屏風びんぶ一重いっじゆうのそあたに未まど睦言むつごの明あのこる

樂たのしむ間まもあく白しろむ窓まど

○目元めもとに紅葉もみぢの愛嬌あいせうみせて

「小浪こなみははつと手てをつかへジツと見みかはそ顔かほ

と顔豆かほまめの胸むねに戀人こいびとと物ものも得え云いはぬ赤面あかおもての梅うめ

とさくらの花角力はなかくらき

シカと返事へんじが出いかぬる

○あやめも分わからぬ戀路こいぢの暗くらみ

「しのぶ姿すがたの頬ほかむり才さいむ軒端見のき覺さへの楚しに比ひ

處ところぞと門かどの戸かどを

爪つめで知しらせる表おもてと内うち

○媚妓めいぎの口くちさきや蜘蛛くまより怖おそい

「何處どこへも遅おそお行ゆはづを一座いざの前まへも何なんのその明あ

日ひあぶられよと儘ままにして心こゝろで野暮のぼろを床とこ急いそぎし

どきも側わきへあけ鳩田とら枕まくらの下したへやる手てさへ

あと、手管てくだの糸いとがらみ

○狂言きやうげんされたをツイ真ま受うけて

「袖そでも袂たもとも食くひ裂さきく亂みだれ心こゝろの亂みだれ髪かみ

清姫きよひめもどきも戀こいの癖くせ

○土手の柳はツイ招かれて

「うきみの衣えもん坂衣紋つくらふ初買は花の江戸町京町や春中合せの松が枝の松の太夫の見返りの柳さくらの仲の町

惠方参りの道まよひ

○親の子ゆゑに子の戀ゆゑに

三代記

「どちらが重ひ輕いやら戀と思との義理替に迷ひぬ開化の辻らんぶ

○意氣を音卜めの枝の涼み船

「オヤオツウ達て居やアがるぜ

船の中

「うそど眞實の二ヶ瀬川だまされぬ氣でたまさきて末の野とあま山とあれ我がれもひり

○障子ひきあひ空うちるがめ

まよひも聞ゆる鼠おれ

「まだ寐もやらぬ手枕よろでもふい事思ひもびりつらくと更てさへ寐まきの衣の肌り

どうでも今宵の待ぼうけ

○おもふ事とかく夢路一通りさものよ

夕霧

「あけくれ戀しき夫の顔を見るより嬉しく走りより

○今あるの確か上野か駒形あたり 達たと思へば目がさめた

○古蘇城外、寒山寺。夜半、鐘聲到。客船、鐘をうつつて船の中

○送り出て来て又た袖とらへ 「モシ此度ではよ達へちや聞ませんヨ 車夫ふ氣がねを立ばあし

○つれあいの心も初手から知れど

○世の中を何に譬へん飛鳥川昨日の淵、今日の瀬と 替りやまひも程がある

○主が蝶さらわたしの花よ

しら糸

「しかも櫻の初日の夜はてあ一座の其中でツ

イ岡惚の浮氣から

逢ふて結ばる岩田おび

○尸と燕がツイ行き逢て

「イヨお鷹さん戀の飛脚うね」たとへ枕の替さ

をもとも云ひあづなまよりや女房ぢやものナゼ

文である云て越ての下さんせぬ一寸と御ら

んまさいよヲ此文を

いつも嘉諾に因りさる

○無理あねがひもお前に添ふて

「天神様へ願かけて梅を一生絶たどへ其お蔭

やら嬉しい返事二世も三世も先の世かけて

善ひし中ぢや無いういあ

夫婦あかよく暮したさ

○私しやぬしゆあ主や私しゆあ

「やほあ田舎の暮しにも機もかり候ちん仕事

あれぬ世帯に苦勞さる

○秋とおもへぬ夜の短かきよ

「宵に寐よとりの夜々にせぬれまいとの戀の恋

日の出ぬ世界があまきよ

○及ばあいとりの夫や氣が弱い

「學而時習之

勉強次第で物ある

○車挽ても手仕事しても

「樂亦在其中ニ

ためたお金の自由の權

○香水シヤボンの色香にまよひ

「様子うるのがお前の家業

のつた私しの開化ぶり

○女の生徒が浮氣よあつて

「こがれ初たる戀人と語らふ間さへ夏の夜の

短い契りの本意あいに列れ處たづぬる便りさ

へ思ふにまかせぬ國のむかひ

卒業せぬ間よ歸郷さる

○水よ流して苦勞も夏の

「美酒樽中置千斛載妓隨波任去留

月に棹さきすゝみ船

○月が高いとゆだんがおちど

夕くみ

「逢た其夜ついで轉び寐の帯もとかいて夫あ

りに二人が裾へるり衣かけてど顔む壁言の

夢も見ぬ間にあけがらす

○愛におぼれて我まゝ者に

「養不_レ教_レ父之過_テ也

盲_テちや親たる義務たゝぬ

○息子の爲めとて溜たる金も

「有_レ田不_レ耕_テ者子孫空_シ

おしへ無ければ水は泡

○おもふお方に途中で別れ

辨_ハ空_林院

「いと_ゞおぼろ夜に降_リ春雨_ハ落_ルハ涙_カと

袖_ウち拂_ヒ裾_ヲをとりしほくすごく_と迷

ひゆく

戀_ノ迷_子にゐる_とたし

○枕相手に寫真をあがめ

辨_ハ當_世太_鼓

「知らぬ顔_ヲして出_給ひし其_面顔_ハ身_ヲとへど

眞_ノ主_ハあまあとの

主_トそひ寐_ヲをし_ところ

○卒業しゃんすを樂みくらし

「たどへ焦_レて死_ぬればとて

勉強_ノお邪_廣が何_ノまア

○酒が言ひすかお前の邪けん

「つるも口説の其中にとけし葛田のもつれ髪
ぢらして泣きが樂みか
○くるも通ひのお容と見かけ

「イザ事問らん惠方さへ
聞かむに引き出さ人力車

○縁と云ふ奴ア不思議おもの上
「何やら草紙に書たのを其方に見せて問ふた
らハ戀といふ字と云ふたのを結び初めの殿
御ぢやと

筆や舛紙が仲人する

◎似屁物語

昔し太田道灌とある云へる豪穴のそぐれて屁道一煮され

けるが一日の事狩に出られ腹のまきたる儘辨當をシコ玉
食へ込れしゆゑ腹はりて大便頻し萌し来れど然りとて野
雪隠とやらんも如何あり然るべき廁の無さかと思ね廻ら
れけるとき山の麓に細小ある白屋ありけれハ道灌ハ打よ
ろこび尻をモテくとして飛入り給ひ俄に用事にて離儀
いたま廁あらば借し以へと音信しうハ内より美しき少女
立出てつ見そあらそ如き見苦しき場所をきと厭ひ給はむ
ハ澤山垂させたまへと應答しよど得たりや應と廁中へ
飛び込れ矢庭に尻を塞りてウシと氣張れど如何おあしけ
ん大便の少しも出さざる尻の七ツハツも放たれける
今ハ爲方よしと衣を下して立たまふを少女ハ何おもひけ
ん籬に咲たる山吹の花一枝取り取て道灌の前へ捧げしか

ば道灌の不思議におもひ如何なる心にやと問はまれば
少女の恥し氣

七尾八尾鼻にうげとも山吹の

實の一ツだに出入り我身屁道ののみを知

と答へたるふ道灌の赤面して恥しめを得たりと其後のみを

て歌道を知らざるが故に斯る辱しめを得たりと其後のみを

管に敷島の道ののみよ心をよせ名歌あまた詠み出られぬ後

に到りて主人上杉氏の爲に恐れ浴室よて毒屁あまた放掛

られて殺されんとあしけるとさ少しも驚かず

斯る時きこそお屁のくさからめ

これを一生の最期屁として散あく屁をすぼめけるとまん

樂 草 誌 終

明治二十二年十二月十八日印刷
明治二十二年十二月二十日出版

定 價 金 拾 五 錢

版 權 登 録

著 作 者 西 森 武 城

東 京 市 神 田 區 錦 町 二 丁 目 三 番 地

發 行 者 山 田 安 貞

所 有 權

東 京 市 神 田 區 今 川 小 路 三 丁 目 一 番 地

印 刷 者 田 口 高 朗

共和書店稗史小説發行略目

二 人 大名 西洋綴美本 全 登 冊
 大 綾 錦 都 花 衣 全
 一 讀 當 世 書 生 氣 質 全
 三 牛 頭 淺 吉 輪 回 火 車 全
 三 途 阿 岩 全
 一 龍 年 夜 花 全
 一 青 年 友 友 全
 一 花 廼 毒 婦 美 代 吉 全
 一 砂 中 的 黃 金 全
 一 造 化 中 的 黃 金 全
 一 原 理 男 女 交 合 新 論 全

一 清 水 觀 音 片 輪 車 全
 一 通 夜 聞 書 全
 一 奈 良 屏 風 的 張 交 全
 一 國 扇 全
 一 善 惡 二 松 譚 全
 一 十 種 畫 夜 帶 全
 一 十 種 畫 夜 帶 全
 一 就 與 正 夢 草 紙 全
 一 黑 白 正 夢 草 紙 全
 一 床 飾 苜 蒲 刀 全
 一 色 情 淵 刃 傷 譚 全
 一 霜 夜 的 松 全

三 相 生 巴 全
 一 松 間 指 月 全
 一 純 金 指 環 全
 一 他 野 的 緣 全
 一 枯 野 的 月 全
 一 情 野 的 月 全
 一 鴻 池 山 中 成 太 郎 實 傳 全
 一 眞 如 的 月 全
 一 佐 賀 的 夜 嵐 江 藤 新 平 全
 一 秋 錦 類 風 露 全
 一 楠 家 的 由 緣 紫 威 毛 全
 一 新 式 近 江 八 景 全

一 春 的 色 野 山 花 全
 一 人 間 初 山 踏 全
 一 猿 猴 榮 次 二 葉 迺 鏡 面 全
 一 玉 兔 的 夜 全
 一 雪 的 夜 全
 一 瀧 的 白 糸 全
 一 實 說 名 古 屋 帶 全
 一 大 鹽 三 津 迺 白 波 全
 一 異 聞 全
 一 花 茨 露 面 影 全
 一 雲 的 行 末 全
 一 牧 的 月 影 全
 一 都 育 東 寫 繪 全

初嵐蘆間蟹	北時雨由緣合傘	花月草紙	情談比翼塚	色競松與紅葉	尊王雪月花	異閑	繫駒與州唄	綠	大和花魁若八總	文庫	偽勤王	眞佐野	掛的千筋矢
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
近世野餉駒	奇聞	色競雪間鷺	昔頑固の十二刻限	今開化の廿四時間	明治大鷹裁判	櫻	初日出峯戀輕風	河	菊の千	籬	春遊雉子歡聲	銀神社雙龍奇談	紙由來記
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全

持別大賣別所

東京淺草區三好町	公日本橋區本石町	公區元四日市町	公區通三丁目	公區通四丁目	公橋亮町	公京橋區大經町	備前岡山中之町	安藝廣島東積町	月防山口	馬國赤間町	伯耆米子尾高町	公法勝寺町	出雲松江天神町
大川屋	上田屋	金泉堂	金櫻堂	春陽堂	鶴陽社	自屏閣	森由禎造	清水庫三郎	宮川臣吉	西尾商店	今井兼文	龜井弘文堂	川岡清助
出雲松江天神町	公大橋	阿波德島町橋詰	公通町五丁目	讃岐高松丸尾町	公早平内町	公丸尾區及町	公丸尾區及町	公丸尾區及町	伊豫松山港町三丁目	公港町五丁目	公港町五丁目	公今治町	大戸利七
國山善三右衛門	坂井源助	坂井源助	開文合	署方儀三郎	坂田保藏	開文合	安藤國造	世良書齋店	向井義次郎	土肥與平	曾根伊兵衛	曾根伊兵衛	曾根伊兵衛

丹波宮津本町	石見須田	豐前津古博多町	豐前大分京町	豐前白井町	筑前府多中島町	全 駒屋町	全 博多町	全 福岡橋口町	全 箕子町	全 現久留米米屋町	全 三本松町	全 米屋町		
南波庄兵衛	上島長助	安達幾太郎	梅津壽平	中島宇助	山川正三郎	甲斐文七郎	甲斐治平	林田芳太郎	右田喜九郎	山崎正登	江藤正證	赤司平助	小柳幸二郎	
全 須賀川高町	全 肥前長崎引地町	全 肥前長崎引地町	全 酒屋町	全 佐賀白山町	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	全 佐賀新馬場	
相浦卯三郎	三池壽館	鶴野常藏	安中盛文堂	安中虎屋號	穎川平三郎	河內莊助	博聞社代理店	長崎善次郎	樂田善八郎	永井島卷堂	齊藤陳太郎	齊藤源八郎	長山喜三郎	石原知一

肥後熊本上通町	全 高瀬本町	全 山鹿湯町	全 八代細工町	全 八代本町	全 新地郡限府町	全 上益城郡御旅町	肥前諫早町	對馬原	豐前小倉	豐前鶴崎	豐前津	鹿兒島伊集院	日向郡城	全 延岡新小路
河島又次郎	浦田書店	三益屋	瀧本時昌堂	岩本理平	中島屋	河邊傳吉	高橋蘇平	茂村源助	卒島倉吉	岩津要藏	野依曆三	安樂徳藏	高野助右衛門	遠山貞一
全 越後新潟古町通二番町	全 全 本町通八番町	全 全 本町通九番町	全 長岡東二之町	全 柏崎下町	全 新發田立賣橋	全 高田箱崎屋町	全 全 兵隊町	全 全 兵隊町	全 全 兵隊町	全 全 兵隊町	全 全 兵隊町	全 全 兵隊町	全 全 兵隊町	全 全 兵隊町
井筒駒吉	三條屋又吉	越中屋治郎八	長谷川彌一	常山書店	高砂屋長次郎	室直三郎	杉田貞二郎	佐々木俊治	本田書店	伊勢安書房	野崎九兵衛	津田敬助	石塚喜三郎	白鳥宗次



